

骨髄バンクの全国大会で体験者のお話しの依頼 ミニオン

骨髄バンクの全国大会がありまして 骨髄移植の体験者 9人が舞台上がって5分くらいたんたと話していきましました。私の番になったとき 気持ちが高ぶりすぎて「今 息ができていることに感謝です」と言って泣き出してしまいました。そして沈黙。皆さんの拍手で私の番が終わりました。恥ずかしかった。

舞台におりたとき「とても感動した」と言ってくれた人がいました。何かが伝わったと嬉しかったです。

骨髄移植するには無菌室内で何日か過ごさなければなりません。移植体験者でインスタで知り合った人に 自分の免疫力をおとしての移植。苦しい状態をうたえていました。顔もみたことも話したこともありません。そんな話しを何気なくその会の談話会で話していました。ビックリなのが 私の話しをする前の人だったのです。背中をポンポンとたたいて「わかるよ つらかったね」と言ってくれてました。

皆さんに感動を伝えられる一日でした。



Photo by ミニオン

お祭りの思い出 岡ちゃん

私が育った町のお祭りは、毎年7月24日と25日の2日間行われていました。町の中心の大通りに沢山の屋台がでて、とても賑やかでした。25日は神社の神輿が繰り出され、沢山の見物人でおしくらまんじゅうの様でした。中学生の頃までの私にとって、夏祭りの神輿を見ることは、なくてはならない夏の楽しみでした。

祭りでは、屋台を横目に同じ道を行ったり来たり、19時頃から22時近くまで歩き回りました。毎年あんず飴を買ったり、水ヨーヨーを買ったり、一つ一つが祭りの思い出になりました。友達や友達の家族、近所の大人たち、学校の先生など、同じ道を歩く仲間たちと目が合えば、その度に手を振りました。

周りの人々とのコミュニケーションを取ることや、非日常を楽しめるお祭りの意味を、見出すことが出来たと思っています。

夏祭りの神輿について、昔から夏は食中毒や、疫病の流行る季節として恐れられていたので、この時期に神様のお出ましを仰ぎ、氏子の健康と地域の安全を祈願するものとされているそうです。

神様に守られながら、人生の役割を全うする人として、身の回りのあるゆる物と共に生きることに感謝したいと思います。

10
October



Photo by ミニオン

心動かされるエピソード
や素敵なお写真をお寄せ頂き、いつもありがとうございます

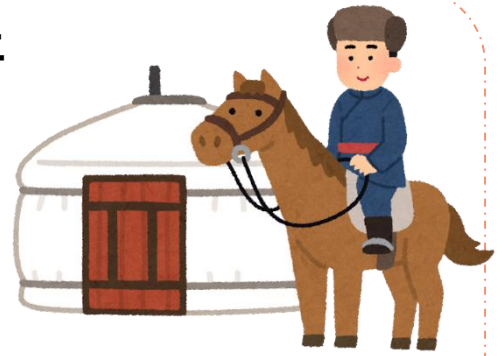


Photo by 岡ちゃん



モンゴル人の死生観について

ニャンコ先生



表題は先日「がん哲学外来市民学会・zoom によるつながるカフェ」で北澤彰浩先生の講演があり、その感想です。

北澤先生は佐久総合病院をはじめ、がん哲では有名な方なのですが、私は始めてでした。北澤先生は今年外務省医務官としてモンゴルに赴任、日本のために外交官、医務官として活躍されています。そこで感じたモンゴルについての講演でした。モンゴルの土地の広さは日本の4倍、人口は40分の1の350万人、首都ウランバートルは人口の半数の方が住む大都会だそうです。

遊牧民として誇りを持ち、長生きしたいとは思わないそうです。シャーマンが存在し、例えば50歳で亡くなった方を見て、「3歳長く生きられた(逆もある)」とか言われるそうです。死後も人の霊魂は存在し続け、祖先の霊として家族や子孫を見守ると考えられています。祖先を敬い、供養することが重要視されます。

チベット仏教を信仰の方が多く、この宗教に基づいた死生観を持っています。死後は新しい生命に生まれ変わると信じられています。死は一つの段階に過ぎず、生まれ変わりの連続の一部として捉えられています。生前の行いや道徳的な行動が、次の生に影響を与えられられています。人々は自然と密接なつながりを持ち、生死も自然の一部として受け入れられています。遊牧民として広大な草原や山々で生活するモンゴル人にとって、自然の中で生まれ、自然に還るという考え方が根付いています。死生観では、死は恐れるべきものではなく、自然の循環の一部として受け入れられるものです。

伝統的な葬儀は、自然に還るという思想から、遺体を草原や山に放置して自然に返す「風葬」や「鳥葬」、火葬、土葬などが行われてきました。このような葬儀方法は、地球や自然に自分を返すという考えを反映しています。死は家族や共同体において非常に重要な出来事であり、亡くなった人を敬い、共に悼む文化が根強くあります。

以上ですがモンゴルについて少し理解できたような気がしました。今まで私が考えてきたこととの違いや、死を考え直すヒントになりました。



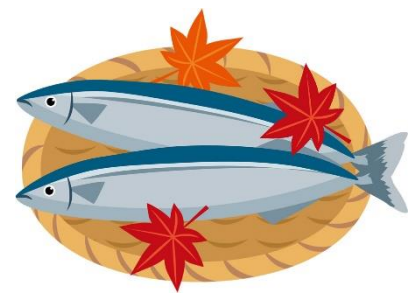
最近読んだ本「アラバマ物語」(To Kill a Mockingbird)

ハーバー・リー著 1960年

うらちゃん

原題 To Kill a Mockingbird(ものまね鳥を殺すのは)は、アメリカ南部アラバマ州で起きた黒人の白人女性への暴行容疑に対する裁判で、全員白人陪審員の偏見と人種差別を描いている。その内容から米国の高校では教材としてしばしば用いられているらしい。1930年代米国南部の黒人への酷い扱いは勿論のこと、白人コミュニティ、白人同士の微妙な立場の違いも描かれている。白熱する法廷劇を期待したのだが、黒人に対する不条理な差別があるだけで、全く盛り上がらなかった。しかし、黒人の弁護士となったアティカスが自分の7歳の娘から、様々なこの世の不条理(黒人や貧困、障害者などの社会的弱者へのまなざし)について問われるシーンが度々出てくる。その都度、父アティカスは娘に当時の精一杯の正義を誠実に伝え、丁寧に応える。彼が語る言葉は、正義と良心に溢れ、親として見習いたいと思った。この言葉たちがこの本が読み継がれている理由なのだと感じた。

また、その時代背景と田舎町、子どもたちの遊ぶ様子は、大好きな「トムソーヤの冒険・ハックルベリーフィンの冒険」の数々のシーンが思い出され、私はその時代に生きていないのにとっても懐かしい気分になった。



巣鴨カフェのニュースレターは、前代表さくらさんが「紙面上のカフェ」と位置付け、大切にしていってました。どなたでもどんなことでも匿名で書いていただいています。

例えば、話すのは抵抗がある人、会場に来ることができない人、今まで誰にも言えなかったこと、不安な時の癒しや解消法、日頃ぼんやりと考えていること、今ハマっていること、既にカフェで話したこと等々、**何でもOK**です。書いてみようかなという方は、スタッフにお声掛けください。お待ちしております！

岡倉天心記念がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」

ugamocafe.sakura@gmail.com

<https://sugamo-sakura.com/>

後援：一般社団法人がん哲学外来

代表 西原 光治
編集 浦川 慶子

ありがとう

